

ディリー・ジーザス・ニュース #165

イエスの祭りにおける最後の教え：「わたしは門であり、良い羊飼いである」

善き羊飼い vs. 見知らぬ人

ヨハネ10.1-6

1 「パリサイ人たちよ、よくよく言っておく。羊の囲いに門から入らずに、ほかの所からはいつてくる者は、盗人であり、強盗である。2 門から入る者は、羊の牧者である。

3 「門番は羊のために門を開け、羊たちはその声に聞き従います。門番は自分の羊の名前を呼び、羊たちを連れ出します。4 自分の羊を皆連れ出すと、羊たちは先頭に立って進みます。羊たちは羊の声を知っているので、羊たちも従います。5 しかし、彼らは決して見知らぬ人についていくことはありません。それどころか、見知らぬ人の声を認識できないので、逃げてしまうのです。」

6 イエスはこの比喩表現を使いましたが、パリサイ人はイエスが何を言っているのか理解できませんでした。

=====

注：私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します：マタイ =^{MT}、マーク=^M、ルカ=^L、ヨハネ=^J、使徒行伝=^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**赤いイタリック体はイエスの言葉を示します。** 旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	エルサレムの街路
タイムライン	9月（31月）
イエスの生涯の文脈	第六段階：イエスの後期ユダヤ教宣教 B. 仮庵の祭りにおけるイエスの宣教
	5. 仮庵でのイエスの最後の教え：「私は門であり、良い羊飼いである」
タイトル	i. 善き羊飼い vs 見知らぬ人

コメント：

ヨハネによる福音書第9章で、エルサレムの街路でイエスとパリサイとの対話は、第10章まで途切れることなく続きました。イエスは、第8章と第9章の光と闇、あるいは視覚と視覚の喪失というテーマから、仮庵の祭りのもう一つの重要な背景概念、すなわち「良い羊飼い」としての神へと話を移しました。

ディリー・ジーザス・ニュース #165

出エジプトの時代、そしてシナイの荒野での40年間の滞在を通して、神が羊飼いのように民を世話されたことが、この祭りの真髄でした。（仮庵の祭りとヨハネによる福音書7章11節から10章21節の簡単な紹介については、「[DAILY JESUS NEWS](#)」第144号をご覧ください。）

イエスはヨハネによる福音書第10章でさらに二つの「わたしはある」という表現をされました。「わたしは門である」と「わたしは良い羊飼いである」です。イエスに与えられたこの二つの複合的な称号はどちらも羊の世話に関連しており、祭りにふさわしいものでした。

今日の朗読の中で、イエスは「異邦人」あるいは「泥棒」が羊と関わる様子と、ご自身が羊に対して示す愛情深い気遣いを対比させました。「異邦人」は羊の福祉に対する真の愛や配慮を持っていませんでした。彼らはただ金を稼ぐためだけに働いており、報酬さえ得られればどんな仕事でも構わなかつたのです。そのため、彼らは羊を自分たちの目的と利益のために利用したのです。

イエスはパリサイ人自身を「異邦人」、つまり神の民を私利私欲のために利用する利己的な指導者として主に考えていました。彼らは、癒された男を会堂から破門するという行為によって、まさにこの行為を示しました。それは、彼らが何度も彼の証を聞くよう求めたのに、彼が真実を語ったというだけの理由でのことでした。彼らは間もなく、イエスの裁判を操作して死刑判決を下すという方法で、真の泥棒であり殺人者であることを露呈するでしょう。

の生涯と教えの流れを全体的に見ると、第10章は、イエスが隠遁期間の最後（マタイ18章）、仮庵の祭りの直前に示された真の偉大さに関する教えと見事に合致しています。イエスの「門番」と「良い羊飼い」としての働きは、謙虚で愛に満ちた奉仕型リーダーシップの輝かしい実践例でした。

応用：

泥棒は、自分の利益のためなら、他人を犠牲にしても、何でも言ったりやったりします。破壊的な行動は必然的に自己中心的です。愛は人を築き上げ、利己心は人を傷つけます。

あなたは、自分の言葉や態度で常に他人を高めていますか、それとも傷つけていますか？

他の人を介護する関係において、どうすれば良い羊飼いであるイエスのようになれるでしょうか。